SCM–11211），田名塩田（松本雅人 s.n., Aug. 16, 1998, SCM–10883）．座間市小池東原（松本雅人 s.n., Oct. 5, 1998, KPM–NA117139）．（ACM: 厚木市郷土資料館, KPM: 神奈川県立生命の星・地球博物館, SCM: 相模原市立博物館）．

本稿をまとめるにあたり，御助言をいただいた門田裕一博士と，生育地の情報を寄せてくださった松本雅人氏に謝意を表する．

（神奈川県立生命の星・地球博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History,
Odawara, Kanagawa, 250–0031 JAPAN）

新　刊

□Saunders R. M.：**Monograph of *Schisandra* (Schisandraceae)** 146 pp. 2000. The American Society of Plant Taxonomists. ＄21.00.

これはアメリカ植物分類学会が刊行している Systematic Botaniy Monographs の 58 巻として出版された，文字通りマツブサ属の分類誌である．著者 Saunders はすでに同じシリーズの 54 巻（1998）でサネカズラ属を纏めている．著者によればマツブサ属は 23 種に分類され，1 種（*S. glabra*）が北アメリカに産する他はすべてアジア産で，多様性の中心は中国南東部から中南部にある．本書は，この属についての研究史，形態学，生化学，胚発生，生物地理などからの分析，形態形質にもとづく系統解析とそれに基礎をおく分類体系，各種についての詳細な記載と標本などからなる．いずれの分析も詳細でかつ適切な評価が与えられている．日本に産するマツブサとチョウセンゴミシの扱いには従来と変わりはない．本書は多数の標本を引用しているが，日本の標本館の標本は数点を除き引用されていない．このような総括的研究にどの研究機関も貸出しなどの協力ができなかったのは，事情があるとはいえ悔やまれる．（大場秀章）

□李　永魯：**韓国植物研究院報　第一号．**

李　永魯氏が主催する韓国植物研究院から研究報告が出版された．韓国植物研究院報第一号（Bull. of Korea Plant Research No. 1, May 10, 2000）である．B5 判，50頁からなり，多くの美しいカラー写真や図を入れて，韓国に産する *Pulsatilla*, *Asarum*, *Orostachys*, *Elsholtzia*, *Nuphar*, *Allium scorodoprasm* L. の解説や，韓国新産の植物などが報告されている．論文は主に韓国語であるが，必要なところは英語で書かれている．幾つかの新種や新変種が見られる．韓国の植物は日本に深い関係を持つので，この報告書は日本の植物研究にも見逃せないものである．定価が書かれていないので，非売品だと思う．出版は次の所である．韓国植物研究院，ソウル特別市鐘路区東崇洞1–88．（山崎　敬）

□土門尚三：**山形県　北庄内の植物誌**　190 pp. 1999．北庄内の植物誌刊行会．￥3,500（税別）．

力作である．本書でいう北庄内とは，山形県日本海側の庄内地方のうちの最上川以北を指し，鳥海山と飛島を含んでいる．全体の構成は，Ⅰ．山形県北庄内の代表的な植物の図譜，Ⅱ．山形県北庄内の植物相（フロラ）について，Ⅲ．山形県北庄内の植物目録，Ⅳ．分布・分類学上特記すべき植物，の 4 つとなっている．パートⅠにはチョウカイフスマ，チョウカイアザミなど力強い 41 葉の線画が収録されている．著者から原画を見せていただいたときから本書の刊行を楽しみにしていたものである．パートⅡには植物相の特徴と植生が概観されている．本書は，「山形県の 8 %を占めているこの北庄内に，151 科 1,747 種もの高等植物が自生していることが明らかになった．じつに山形県全体からすれば約 75 %もの植物が存在することになる．山形県においてこれだけの面積にこれだけのフロラは他にないと言ってよかろう」という．パートⅢがそのリストであるが，もとになる標本の所在を明記して欲しいところである．本地域に含まれる飛島はトビシマカンゾウ，ヒロハキクザキイチゲなど固有の分類群が分布するほか，山形県に 62 種が知られている日本海要素がたった 3 種だけ（オオイタドリ，ハイイヌツゲ，ミチノクホンモンジスゲ）しかないというのは驚きである．パートⅣには特記すべき植物の，北庄内及び山形県での形

態と分類に関する情報が述べられている．

冒頭に力作であると述べた．それだけにミスプリントが散見されるのが惜しまれる．10ページにチョウカイアザミが掲載され，学名は *Cirsium borealinipponense* Kitam. とある．新見解か？ と思いリストを参照すると，*C. chokaiense* Kitam. となっている．単なるミスプリントのようである．76ページのユキツバキの学名も訂正する必要がある．学名の著者名（author name）は，本誌も推奨するBrummit & Powell: Authors of Plant Names (1992) に基本的にしたがっているようであるが，統一がとれていないところがある．次回の訂正を期待したい．申し込み及び問い合わせ先は次のとおりである．〒999-[redacted] 山形県飽海郡[redacted] Tel [redacted] 土門尚三氏まで．（門田裕一）

□茂木 透（写真），石井英美ほか（解説）：**樹に咲く花 離弁花1** 719 pp. 2000. 山と渓谷社．¥3,600（税別）．

日本の樹木の写真集である．日本に自生するものと，良く見かける栽培種が載せられている．ただ小笠原や琉球の一部の種類は欠けている．それぞれの種類の全形図だけでなく，葉や芽，木の肌，花や果実の大写し，など特徴となる部分図が豊富に載せられているし，近縁のものはそれぞれ写真を並べて違いがわかるように工夫されているなど，従来の図鑑にない積極的な試みがなされている．それぞれの写真は見事で，写真や印刷の技術も進んだ感を抱かせる．離弁花類第2巻と合弁花類，単子葉，針葉樹を含めた第3巻とが予定され，本年度内には出版されるという．全部そろうと画期的な写真図鑑になるであろう．ただ素人向けに編集されているので，研究者にとってはもの足りない感じもする． （山崎 敬）

本書の'はじめに'で，茂木氏は木の一生を人間にたとえ，本質的なものの多くが日常の何気ない出来事の集積からなり立っていることが多く，このことは木にも当て嵌まるので，木の生活史にもっと目を向けることが重要なのではないか，と記している．これが茂木氏の写真撮影の根底にある考え方であるといってよい．茂木氏が木の枝葉や花・果実に留まらず，樹形，樹肌，冬芽，種子など，実に様々な部分に焦点を当て写真を撮られている，ということを同じ写真家の木原 均氏から伺ったのはもうだいぶ前のことであった．それがようやく結晶したのが本書である．'樹に咲く花' は3巻からなり，Englerの分類体系（1964年）による配列で，日本に自生する（実際には栽培される種も若干含む）樹木をヤマモモ科からセンリョウ科，そしてバラ科を本書1が扱い，スズカケノキ科以降が離弁花2とし，合弁花，単子葉，裸子が3として刊行される予定である．

木では花や枝葉でさえ，写真化するのは素人には不可能と思われるくらい難しい．このことを独力でやり遂げるだけでもさぞやたいへんと思うのだが，冬芽や種子，樹肌など，さらには解剖学的写真などをも撮影したのである．どれだけの時間の費やしたことだろう．その忍耐力には脱帽したい．世界の温帯でも一際高い多様性をもつ日本の木本フロラであるが，本書の出現はこれをたいへん身近なものにしてくれた．図鑑として世界に誇れる一冊である． （大場秀章）

□吉田外司夫（写真・解説）：**天の花回廊 ヒマラヤ・中国横断山脈の植物たち** 143 pp. 2000. 朝日新聞社．¥4,800（税別）．

ヒマラヤからチベット，中国横断山脈を中心とした地域の植物写真を撮影される世界の写真家の中でも本書の著者であり撮影者である吉田氏は他の写真家の追従を許さぬ特技をもつ．それは氏自身が対象とした植物を現場で属レベルは無論，おおむね種のレベルで同定でき，類似種から区別する特徴をわきまえて植物に接していることである．芸術的な観点からの評価は判らないが，吉田氏の写真はその植物のもつ特徴がよく捕らえられて植物学の立場からみるとたいへん参考になる．

本書はアサヒグラフに連載されていた'天の花回廊'という連載記事を纏めたものであるが，巻末に収録した種についての簡素な記載が付されている．本文は吉田氏自身の撮影植物との出会い，その植物にまつわるエピソード，研究史や問題点など氏の豊富な知識が随所に散りばめられていて，興味深い．中国・ヒマラヤ地域植物への入門書としても広く推薦したい一書である． （大場秀章）